

抵抗の群像



消費組合運動から福祉の道

ひとすじに歩んだ

近藤 一男

私の父、近藤一男は一九〇六

(明治39)年、岡山県の山奥、美作町林野に生まれ、一九二三年京都へ出て立命館大学で蜷川虎三教授や末川博教授の講義を学ぶなかで社会の矛盾に目を開き、学生時代から理想としていた消費組合設立の運動に参加、花園の自宅を解放して地域住民と農民による京都プロレタリア消費組合を設立。母子もその頃すでに長男長女二人を育てながら組合を手伝うようになりました。以来両親はつねに思想・信条、仕事の上でも一体となって闘いつづけたのでした。

三〇年、日本プロレタリア作家同盟京都支部の会員となり、財政部長を担当。三一年八月二十六日、近藤は専従の出野さんと共に太秦署に拘引。京都の労働者や農民文化人の多くが検挙された八・二六

事件でした。母は三人目の子ども

の出産予定日の十月二日になってお父を返してくれなかったため、お産用具を風呂敷に包み、二人の子どもをつれて太秦署に行き、

「主人を帰さないならここで産ませてもらいます」と子ども達にお弁当を食べさせはじめたら、特高も驚き、一時間後に二人を釈放しました。まさに母は強しで、翌日に生まれたのが私二女の伸子でした。母は三三年五月一歳半の私を背に日本無産消費組合連盟第二回総会に代表として上京、悪性のクループ性肺炎で肺壞疽にかかり、看病のために東上した父も長引く治療のため帰れなくなり、そのまま関東消費組合本部で働くようになりしました。

三四年、近藤は東京交通労働組合の消費組合にかかわり、特高に

逮捕、激しく暴行されましたが、起訴は免れました。東交巢鴨労働組合の常任となり、青年部、婦人部に呼びかけ、機関紙「フレンド」を発行、築地小劇場と新協劇団への観劇サークル活動など、青年の自主的な意識を高めました。当時

青年部で活躍していたのが丸山三之助さんで、父は後に検挙された四名の青年部員の思想を指導したということ、四一年八月逮捕、

四二年三月まで拘禁され、懲役四年執行猶予三年の実刑に。法務局へ月一回の出頭。出所後、藤井恵照師(元教誨師)から和敬会母子寮と保育園を託され、戦災をくぐりぬけて母子と園児を守りました。

戦後は、板橋区本蓮沼生活協同組合を設立し、食糧を平等に分配し、地域の人々から信頼を得て民主化運動を推進。地域の青年婦人を集めて志村青年演劇音楽研究会を設立し、青年のサークル文化活動にも協力しました。社会福祉事業では、板橋区社会事業協議会を結成、園長、保母、保護者の三位一体で連合運動会の開催や、対区、対厚生省への諸要求の先頭に立ち

ました。その後私立保育園の全国組織の発展のために尽力し、「全私保連の鬼」と呼ばれるにいたりました。このように常に組織づくりに情熱を燃やした父のエネルギーの源は、消費組合運動と治安維持法と闘った歴史だと思っています。

最後に勝目テルさんの著書『未来にかけた日日』から私の治安維持法との出会いを紹介します。

「関東消費組合連盟の東急婦人部会を本所の靴屋の二階で開きましたら、突然『勝目テルはいるかッ』と特高数人が、そこにいた近藤系子、松本ちよ、山戸かつよも一緒に両国署へ連行。近藤系子は、ヨチヨチ歩きの伸チャンを連れていたので、婦人房の中で『おしくらまんじゅう』をしたり、童謡を歌ったり大忙しをして楽しんだものです」。一歳十一カ月の私は、五日間留置所に。治安維持法犠牲者の最年少者だと思っています。

私は現在、同盟中央本部の女性部で活動していますが、父母の遺志を継いで、再び戦争と暗黒政治を許さないためにがんばります。

(東京都本部・四津谷伸子)